

## 「感情の表出と制御」研究の概観

筑波大学大学院(博)心理学研究科 崔 京姫

筑波大学心理学系 新井 邦二郎

A brief review of the studies on 'emotional expression and regulation'

Kounghee Choi and Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The aim of this paper is to review studies about 'emotional expression and regulation' and to try to clarify the difference between 'emotional expressiveness', 'self-disclosure', 'emotional regulation', and 'regulation of emotional expression'. In this paper, we suggest the followings: (1) Studies about 'emotional expression and regulation' can be classified by 2 dimensions: a) inside process or outside expression and b) passive social motivation as strong or weak. (2) Future investigation of this area should study about emotional expression style and how 'emotional expressiveness', 'self-disclosure', 'emotional regulation', and 'regulation of emotional expression' are integrated.

**Key words:** emotion, emotional expressiveness, emotional regulation, self-disclosure, regulation of emotional expression, review

### はじめに

常に他者との関わりの中で生活し、成長していく社会的存在である人間にとって、自分の感情を制御して表すことは、重要な社会的コンピテンスであり、このスキルが不足した場合、社会での不適応と対人関係の失敗をもたらす(Goleman, 1995)。例えば、「待ち合わせに來なかつた友達のつまらない理由を聞いて、すごく腹が立つ時」など、自分の感情をそのまま表すことは、その友達との関係を悪くする恐れがあり、その怒りを抑えたり、他の感情表現(例、笑顔)に置き換えたりする機会が多い。感情表出の制御(regulation of emotional expression)とは、このように、「社会的場面において経験した感情をそのまま表さず、強めたり、弱めたり、他の感情に置き換えたりして、本来とは異なる形に表すこと」である。最近、感情における応用領域での研究が盛んに行われ始めているが、まだ、初期の段階で、使われている用語と内容が錯綜している現状である。そこ

で、本稿では、「感情の表出と制御」を中心とした感情の応用的領域の研究を紹介するとともに、その異同について考察し、「感情表出の制御」の研究の位置づけを試みることにする。さらに、これらに基づき「感情の表出と制御」に関する今後の研究の展望を行うことを目的とする。

### 1. 心理学における感情研究の流れ

齊藤(1986)は、これまでの感情に関する研究を大きく6つに分類し、その概観を試みた。まず初めの①生理心理学的アプローチは、脳生理学など神経組織を中心とした研究で、古くはジェームズ・ラング説とそれを批判したキャノン・バード説などが知られている。次に、②精神分析的アプローチは、幼児の頃の親との強烈な愛憎体験が、その人の人格を形成したり歪めたりすること、そして幼児期の感情経験が大人になってからの人間関係の基盤になっていることを強調したFreud(1974)の説を中心として

いる。このアプローチは、人間関係と感情を心理学的に考える際に重要な示唆を与えると評価される。③情緒動機論的アプローチは、情緒を特殊な種類の動機であるとし、刺激と身体的反応との関係を明らかにしていこうとする立場で、主に、新行動主義の研究者によってとられており、扱われている情緒は怒り、恐れ、性的興奮などのような原初的な感情が多い。また、④認知心理学的アプローチは、人が日常感じている複雑な情緒の心理学的過程について検討し、情緒生起のプロセスや状況を理論化し、実証的研究を行おうとする立場で、Arnold(1960)は評価に、Plutchik(1980)は生得的情緒に重点をおいて研究を行った。⑤社会心理学的アプローチは、愛情などの対人感情の生起についての研究を行い、⑥非言語的伝達のアプローチは、今までの情緒それ自体を目的としている研究とは別に、対人間コミュニケーションの研究における感情研究であり、相手の心理状態を推測する情報として重要な表情などに関する研究を行った。これは、人間の持っている複雑な感情の分類や基本次元について他のアプローチから得られなかった知見を提供している。

感情とパーソナリティについての応用的分野の最近の研究の中で、感情経験と感情表出に関する研究が行われ始めている。その中で、Salovey & Mayer(1990)は、emotional intelligenceという概念を提唱した。emotional intelligenceとは、social intelligenceの一分野で、「自分と他者の感情を正確に評価し、その感情を制御する能力、そして、生活上の課題を解決する情報として感情を利用する能力」であると定義される。emotional intelligenceは、① appraisal and expression of emotion, ② regulation of emotion, ③ utilization of emotion の3つに大別さ

れる(Fig. 1)。

① appraisal and expression of emotion とは、自分と他者の感情の理解の intelligence で、これは自分の感情を正確かつすばやく把握し、より適切に反応し、他者に表現することを可能とする。また、他者の感情反応を早く知覚し、共感するスキルを持っている人は、賢くて優しい人と評価され、そうでない人は、鈍感でがさつなものととして評価される。② regulation of emotion は、自分の感情制御と他者に対する感情表出の制御の intelligence である。③ utilization of emotion は次の4つを含む。すなわち、(a) flexible planning: 感情を転換(mode swing)させることによって、未来の多様なプランを計画することを促進させる intelligence, (b) creative thinking: ポジティブな感情により、記憶組織を活性化させ、認知的材料を統合し、種々のアイディアを出させる intelligence, (c) mode redirected attention: 強力な感情が発生した時、その感情の原因になる問題より、より重要で必要な刺激に注意を向けさせようとする感情処理の intelligence で、例えば、離婚したセールスマンが仕事絡みの問題から離れて、結婚生活の失敗の苦痛を通して得た対人関係の理解へ注意を向けさせることができる。(d) motivating emotions: 感情と気分により複雑な知的課題を動機づけ、作業を促進させる役割をする intelligence である。Salovey & Mayer(1990)は、emotional intelligence の欠如が精神的健康と社会的適応に悪影響を及ぼす可能性について示唆している。

上述したように、心理学における感情の応用的研究は、その重要性は認識されていながらも、その方法論上の困難からその発展が遅れてはいるが、徐々に研究が進められている。

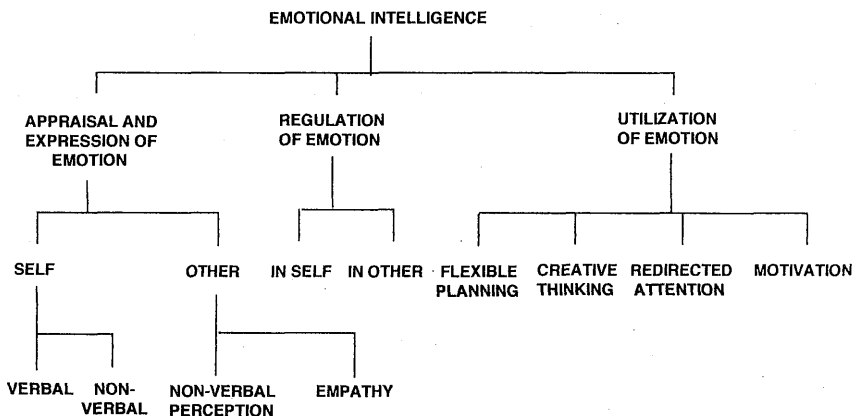


Fig. 1 Conceptualization of emotional intelligence (SALOVEY, P. & MAYER, J. D., 1990)

研究の初期には、感情それ自体は何か、どのように知覚されるかなど、感情への生理学的及び感覚・知覚の分野に関心を持って研究が行われたが、徐々に社会生活の中での対人関係とどう関連するのか、また、課題の解決にはどう利用されるかといったような感情と社会生活及び感情と認知活動という観点からの研究が行われ始めている。「感情の表出と制御」についての研究は、感情やコミュニケーション、対人関係に関する研究の副産物であり、これらの応用的な分野であると言える。

## 2. 「感情表出の制御」及びその近接領域の研究の展開

感情について種々の応用的な分野の研究が行われているが、同じテーマの研究に対し異なる用語が使われったり、異なるテーマの研究に対し同じ用語が使われるなど、研究者の中で用語の使用が混乱している。その中でも「感情の表現性 (emotional expressiveness)」「自己開示 (self-disclosure)」「感情の制御 (emotional regulation)」「感情表出の制御 (regulation of emotional expression)」の4つの用語は、類似しており、各々のテーマでどのような研究が行われており、各々がどのような点で異なるのかを判断しにくい。

そこで、本節では、感情表出の制御の研究を中心にその近接領域の最近の主要な感情研究について概観し、その相違を考察し、その位置づけを試みることにする。

### 2-1. 「感情の表現性」に関する研究

感情の表現性とは、expressiveness (表現性・表出性) という言葉が表わしているように、どれぐらい自分の感情をよく表わせるかということである。

Riggio & Friedman (1986) は、感情を表現しない人は、他人に嫌われると報告し、Noller (1984) は、感情の表現性の貧弱さは結婚生活についての不満と関連していることを明らかにした。感情の表現性と対人関係及び健康との関連については、King & Emmons (1990) が、感情表現における葛藤と健康との関連を調べた研究の中で、表現性と well-being の間に正の相関が見い出され、感情表出における葛藤と精神的苦痛との間に正の相関がみられたと報告している。また、Berry & Pennebaker (1993) は、非言語的及び言語的感情表現と健康についての関連についての研究レビューで、表情、言語、文章などの形で感情表出・抑制と身体的健康との関連について述べている。ここで、彼らは感情を抑制し、表さな

い人の方がそうでない人より、ストレスを感じやすく、ガン、高血圧及び種々の健康上の症状を訴える傾向があることを指摘している。

このように感情の表現性についてのこれまでの研究によると、自分の感情を表現しない人は、精神的・身体的健康及び対人関係において好ましくないという結果が示されている。

### 2-2. 「自己開示」に関する研究

自己開示 (self-disclosure) とは、「自分自身について他者に話すこと」である (Jourad, 1959)。つまり、自己開示とはさまざまな社会的状況において自己についての情報を公開することである。Jourad (1959) は、よく自己開示をする人が精神的に健康であると主張した。しかし、その後、遠藤 (1989) は、自己開示と精神的健康との間には負の相関関係がある、または関連性がないというくいちがいのある研究結果も考慮に入れ、両者の間に逆U字形の曲線的関係を想定したモデルを支持し、それについての検討を行った。その結果、自己開示と精神的健康の間に逆U字形の曲線的関係があるという仮説を立証できなかったが、自己開示を過去の経験や習慣、あるいは行動として捉える場合、対人的適応や対人的機能からすれば、適度な自己開示、すなわち逆U字形の自己開示量が社会的に望ましいとしている。他方、開示意向という態度の面から見た場合は、積極的に自己開示をしようとする意向の高い方が健康な人格であることを示唆している。

### 2-3. 「感情(の内的状態)の制御」に関する研究

感情の制御とは、「感情が発生した状況で、感情の内的状態を変える能力」である。見た目の表出された感情だけを制御するのではなく、どうすれば感情体験そのものを鈍らせたり、変えたりすることが可能であるか、また幼い子どもは、どうすれば感情を変えられるかを理解しているのかに関心をもつ研究が、このテーマのもとで行われている。

Terwogt & Harris (1993) によると、6歳児ですら時間の経過に伴う感情の変化を理解している。すなわち、子どもはある瞬間に感情がよみがえるかもしれないが、典型的には感情が時間とともに弱まるということを理解している。Harris, Olthof, & Terwogt (1981) は、6歳と10歳の子どもを対象とした研究で、子どもは自分の感情を変えることが可能なことを理解していると主張する。どのように感情を変えたのか、すなわち変える方略を尋ねると、6歳児はその場を立ったり、場所を変えたりすると報告する一方、10歳児は、別のことを考えることによっ

て彼らが感じていることを変えることができるという方略を報告し、発達に伴う方略の変化について示唆している。

Garber, Braafladt, & Zeman (1991) は、これまでの心理学の分野で感情と認知は別の正反対の領域であるように扱われてきたことを指摘しながら、感情と認知を統合し、認知領域の専有物であるように思われてきた情報処理理論を用い、感情の制御の解明を試みた。感情の制御の一連の情報処理は次のようである。

- ① 符号化—制御が必要なか、どのような感情が起きたかについての認識のことで、人は制御方略に従事するためには感情的不快を経験しているということを認識することが必要である。
- ② 解釈—感情喚起の原因についての認知的解釈である。
- ③ 目標設定—目標の種類としては、問題解決のための(問題中心的)目標、より単純に感じたり、苦痛を回避するための(感情中心的)目標及び他者からの注意や共感を得るための(社会中心的)目標がある。
- ④ 反応生成—目標達成のための具体的反応の生成である。
- ⑤ 反応評価—発生された反応が、期待した目標をどれほど満たすか(成果期待)、その他の望ましいまたは望ましくない結末をどれほど生み出すか(結果期待)、そして、必要な反応を生み出すことにどれほど有能であるか(効力感期待)を評価することである。
- ⑥ 実行—生成された複数の反応の中で、選択された反応を実行することである。

パーソナリティと社会的発達の重要な側面において「感情(の内的状態)の制御」は、「感情表出の制御」と深く関連している。しかし、本当の感情をうまく隠したり、偽って表したとしても、表出とは異なる感情を感じ続けているという場合は少なくない。このような意味で、「感情の内的状態の制御」と「感情表出の制御」は深く関わっているが同一ではない、区別されるべき概念である。

#### 2-4. 「感情表出の制御」に関する研究

人間は、日ごろ、数多い対人関係を持ちながら生活している。それらの対人関係の中で、自分が感じた感情をそのまま表出するということがむしろ希なことで、いろいろの社会的動機(理由)で自分の感情を制御し、相手に受け入れられると思われる形で表す「感情表出の制御」を行っている。「感情表出の制御」の研究は、感情についての心理学的アプロー

チの副産物でありながら、実際の日常生活でよく遭遇する感情と人間関係とのリンクを密接に結びつける研究として、その重要性が認識され、最近注目され始めている分野である。

このテーマの研究を最初に行った Friesen & Ekman (1972) は、看護学生を対象にした研究で、ひどいやけどの手術の写真を含んだトレーニング映画を見せ、楽しい映画を見た後のように振る舞うようにさせた。この研究から、人は感情を結構うまく、違う感情に変えて表すことが可能であることが明らかにされた。そこから、感情表出の制御はどのような発達経路によって可能になるのか、いつ頃から感情を隠したり、偽ったりすることができるのかに関心をもつようになり、発達の観点から、幼児と児童を対象とした研究が活発に行われてきた。これらの研究は大きく、認知発達の観点からのアプローチと社会発達の観点からのアプローチに分類することができる。

##### ① 認知発達の観点からのアプローチ

感情表出の制御のためには、自分と相手の感情に対する理解、感情表出の制御の方略に関する知識及び様々な認知能力が必要になる。自分の感情がいつ生起し、その感情の表出を制御することが必要かどうかに気づくために、我々は様々な知識を使わなければならない。感情の先行要因に関する知識、早い段階で自分自身の中にある感情を特定化する手がかりに関する知識、感情に続く自分の統制できない行動パターンに関する知識、それらのパターンを実行に移したときの自分自身や周りの人に対する結果に関する知識など、自分の感情についての理解と知識が必要である。これまでの研究では、他者の感情状態を変化させようとする意図的な試みは、生まれて2年目に現れ始めるが、実際に感じていることを隠すために感情表出の制御を方略的に使用できるということは4歳になるまで認識されていないことが示されている。

Harris & Gross (1988) は、本当の感情と見せかけの感情を区別するためには「だます」という心的過程に含まれる再帰的思考が発達しなければならないと主張し、表示規則の意図的な運用には認知能力の要因が関係していることを示唆している。また、自分の感情の表出が社会的にどう解釈されるかを予測したり、相手が何を意図しているかをモニターすることができるか否かが表示規則の制御を行うために前提になるものと推測した。そうしたモニタリング能力やプランニング能力の発現は、言語機能への習得と情報処理能力自体の拡大によって保証されること内田(1991)によって示唆されている。さらに内田

(1991)はこれらを踏まえて、相手の感情や意図を考慮して、自分自身の感情の表出を意図的に制御するのは、何歳から可能であるかを調べた。その結果、表示規則(与えられた状況において社会的に適合すると思われる表出)は、最初は手続的・スクリプト的に使われ、次の段階で、相手の感情や意図を考慮して自覚的に運用されるようになること、またこの時期はプランニングやモニタリング能力が出現して、相手の感情や意図の推測をメタ認知的に捉えられる5歳後半以後であることが明らかにされた。

以上述べたように、認知発達の観点からは、発達を支える要因として、方略的知識の有無、本当の感情と見せかけの感情の区別、再帰的思考能力、モニタリング能力など、制御者の個人内の認知的要因が取り上げられ研究されてきている。

## ②社会発達の観点からのアプローチ

社会的発達の文脈で行われた研究は、社会的表示規則(social display rules)の発達の変化を調べ、子どもの感情表出の制御を明らかにしようとした。社会的表示規則とは「抱いている真の感情とは無関係に、どのように感情を表出すべきかについて命じている社会的規約」(Saarni, 1982)、または、「与えられた状況(場面)において社会的に適合すると思われる表出」(Underwood, Coie & Herbsman, 1992)であると定義されている。つまり表示規則は、特定の感情を示すのを絶対的に禁じたり、逆に要求するというものではなく、ある感情表出の強度の按配を明示する性質をもつ。Cole(1986)は、3-4歳の女児を対象に、がっかりするようなプレゼントを与える場面を設定し、どのような反応を表すのかを観察した結果、子どもは、実験者がいない状況で包みを開けると明らかにがっかりした様子を示すが、実験者がいる状況ではがっかりしたことを隠そうとすることが明らかになった。この結果から、3-4歳の子ども(女児)でも、実験者の前では社会的表示規則を使用し、ネガティブな感情の表出を制御していることが示された。しかし、これらの行動は子ども自身の意図によって行われたものではなく、その場の状況に依存したスクリプト的判断によるものである可能性も高い。そこで、その後相手の違いや年齢、性による反応の差も考慮に入れた研究が行われた。Underwood, Coie & Herbsman(1992)は、3, 5, 7年生を対象に怒りと攻撃行動における表示規則について調べた研究で、怒りと攻撃行動の両方において、仲間に対してより先生に対して表示規則を多く行うと報告した。また、先生に対してのみ年齢が増加するにつれて怒りの表情を隠すと報告している。さらに女の子が男の子より表示規則をはたらかすことを明

らかにしている。つまり、怒りにおける表示規則は、相手と年齢と性によって異なることを示唆している。

一方、Gnepp & Hess(1986)は、環境的・生得的・認知的変数との関連を調べた研究では考慮されていなかった動機(意図)を取り上げることによって、感情表出の制御反応の重要な規定因について示唆を与えた。平林・柏木(1993)も、知識を獲得したとしても実際に行動に移されない場合があることを指摘し、動機を考慮することへの重要性を強調している。実際、Gnepp & Hess(1986)は感情表出を制御しようとする動機の異なる場面における言語の表示規則と表情の表示規則の発達の変化を検討した。この仮想場面を用いた研究では、二つの動機を仮定し、一つは、相手との関係を守ったり、行動の規範を維持するために制御するというような「向社会的動機(prosocial motives)」に基づくものであり、もう一つは自分にとって、ネガティブな結果を避けたり、自尊心を維持するために制御するというような「自己保護的動機(self-protective motives)」に基づくものである。そしてGnepp & Hessはこの研究で、「向社会的動機」における感情表出の制御が、「自己保護的動機」における感情表出の制御よりも、そして、言語の表示規則が表情の表示規則よりも、早く理解されることを明らかにした。

社会的発達からのアプローチからは、このように公的・私的場面、性、動機などを独立変数として、表示規則の獲得とともに行われる感情表出の制御についての検討が行われてきている。

## 2-5. 「感情表出の制御」に関する研究の位置づけ

上述の「感情」、「表出」、「制御」に関する研究レビューに基づいて、「感情の表現性」「自己開示」「感情の内的状態の制御」「感情表出の制御」の研究を2次元上の座標に位置づけてみたい。それらの研究を分類する基準として、①内面的プロセスを扱っているか、外面的表出を扱っているか、②消極的な社会的動機が強いかわ弱いかという2つの軸を設定した(Fig. 2)。なお、社会的動機は、消極的な社会的動機と積極的な社会的動機の二つを想定し、消極的な社会的動機は、「社会的相互作用の中で、他者との関係の維持や自尊心の維持などのマイナス傾向の回避を目標とする動機」とし、積極的な社会的動機は、「社会的相互作用の中で、他者とよい関係を形成することや自分をよりよく理解してもらうことなどプラス傾向への働きかけを目標とする動機」と区別して考えている。

感情(の内的状態)の制御の研究は、経験した感情

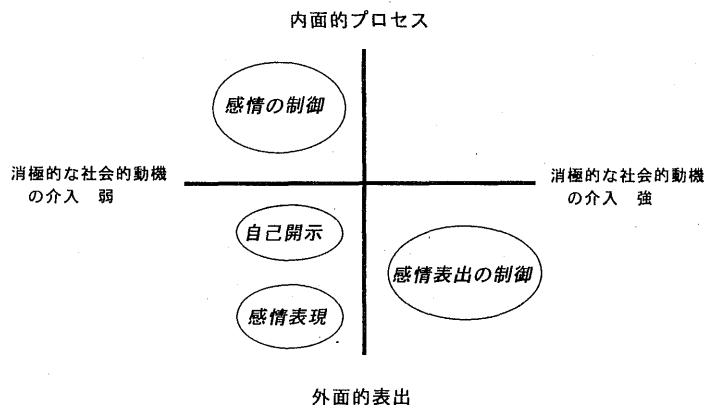


Fig. 2 感情表出の制御及びその接近領域の研究の位置づけ

の外面的表出とは別に、内面的な感情状態の調節に焦点を合わせている。また、自己開示の研究は、いくつかの側面で感情表出の制御の研究とは区別される。まず、感情表出の制御は、感情を誘発させる刺激に対する反応の仕方を問題としており、しかもその反応はその刺激場面で行われ、さらに消極的な社会的動機の影響を強く受けるのに対し、自己開示は、特定の刺激に対する反応というよりは自発的な行動や態度を扱っており、その行動や態度には時間的な制約もなく、消極的な社会的動機の影響を弱く受けることが考えられる。さらに、感情表現の研究と感情表出の制御の研究では、使用されている場面に違いが見られる。例えば、感情表現の研究では、「テレビや本の内容が面白いと笑います」とか「度々、好きな人に好きだと言います」など、消極的な社会的動機の介入が弱い場面である。感情表出の制御の研究では、「頭痛がひどい時に、友人がふざけて頭をたたいた時、腹が立つが笑ってみせる」のように、怒りを表出して関係を悪くしたくないという、消極的な社会的動機の影響が強い場面が使用されている。

## 2-6. 「感情表出の制御」研究の今後の方向

「感情表出の制御」は、両面価値をもつという意味で人にとってアンビバレントな心のはたらきと言えよう。というのは、感情表出の制御は対人関係において人間関係の悪化を防ぐというプラスのはたらきをするという暗黙の認識の反面、自分の感情をいつも隠したり、抑えたりして、他人に合わせてばかりしていることはフラストレーションやストレスの蓄積、アイデンティティの喪失など、精神的健康とのマイナスの関係が予測される。このように感情表

出の制御は、対人関係及と精神的健康との関連において別々の効果が予測されるが、その種の研究がほとんど見あたらないのが現状である。こうした観点からの研究も、今後注目されて然るべきであろう。

対人関係及び精神的健康の要因を考慮すると、感情生起場面における即時の反応のみではなく、その後における内的状態の制御とか感情の表現及び自己開示は重要な意味をもつことが予測される。例えば、社会的各場面で、いつも自分の感情を抑えたり、隠したりして表す人は不健康であることが考えられるが、その後において親密な人への自己開示や感情の表現及び感情の内的状態の制御を適切に行う人は、対人関係と健康の両面において適応的である可能性がある。すなわち、感情(の内的状態)の制御、感情の表出及び感情表出の制御における統合的なスタイルと対人関係と健康との関連を検討することを通して、社会的及び心理的に健康な生活への示唆を得ることが望まれる。

## 3. 要約

まず、感情研究の中で、最近活発に行われている「感情の表出と制御」についての研究を紹介した。その中でも、特に、感情表出の制御を中心とし、それぞれの研究の位置づけを試みた。

本稿では、感情表出のアンビバレント性(対人関係と精神的健康)から、感情表出の制御が対人関係および精神的健康とどう関連するかについての実証的研究の必要性、及び感情生起場面における感情の表現、自己開示、内的状態の制御、感情表出の制御の統合的なスタイルとより多様な変数との関係を検討することへの必要性を示唆した。

## 引用文献

- Arnold, M. B. 1960 *Emotion and personality*. Columbia University Press.
- Berry, D. S. & Pennebaker, J. W. 1993 Nonverbal and verbal emotional expression and health *Psychother Psychosom*, **59**, 11-19.
- Cole, P. M. 1986 Children's spontaneous control of facial expression. *Child Development*, **57**, 1309-1321.
- 遠藤公久 1989 開示状況における開示意向と開示規範からのズレについて—性格特徴との関連—教育心理学研究, **37**, 20-28.
- Freud, S. 1974 フロイト著作集7 人文書院
- フリーゼン W. V. & エクマン P. 1987 工藤力(訳)表情分析入門 誠信書房. (Friesen, W. V. & Ekman, P. 1972 *Emotional in the human face*. 2rd.)
- Garber, J., Braafladt, N. & Zeman, J. 1991 The regulation of sad affect: An information processing perspective. In J. Garber & K. A. Dodge (Eds.), *The development of emotion regulation and dysregulation*. New York: Cambridge university press.
- Gnepp, J. & Hess, D. L. R. 1986 Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, **22**, 103-108.
- Goleman, D. 1995 *Emotional intelligence* New York: Bantam Books.
- Harris, P. L. & Gross, D. 1988 Children's understanding of real and apparent emotion. In J. W. Astington, P. L. Harris & D. R. Olsen (Eds.), *Developing theories of mind*. New York: Cambridge University Press.
- Harris, P. L., Olthof, T., & Terwogt, M. M. 1981 Children's knowledge of emotion. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **22**, 247-261.
- 平林秀美・柏木恵子 1993 情動表出の制御と対人関係に関する発達的研究 発達研究, **9**, 25-39.
- Jourard, S. M. 1959 Self-disclosure and other-cathexis. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **59**, 428-431.
- King, L. A. & Emmons, R. A. 1990 Conflict over emotional expression: psychological and physical correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 864-877.
- Noller, P. 1984 *Nonverbal communication and marital interaction*. New York: Pergamon Press.
- Plutchik, R. 1980 *Emotion; a psychoevolutionary synthesis*. Harper and Row.
- Riggio, R. E. & Friedman, H. S. 1986 Impression formation: The role of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 421-427.
- Saarni, C. 1982 Social and affective function of nonverbal behavior: developmental concerns. In R. S. Feldman (Eds.), *Development of nonverbal behavior in children* New York: Springer-Verlag.
- 斉藤 勇 1986 感情と人間関係の心理 川島書店
- Salovey, P. & Mayer, J. D. 1990 Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, **9**, 185-211.
- Terwogt, M. M. & Harris, P. L. 1993 Understanding of emotion. In M. Bennett (Eds.), *The child as psychologist*. Harvester Wheatsheaf.
- Terwogt, M. M., Olthof, T., van Panthaleon van Eck, O., & Koops, W. 1987 Children's knowledge of the integration of successive emotion. *Perceptual and Motor Skills*, **65**, 407-414.
- 内田伸子 1991 子どもは感情表出を制御できるか。—幼児期における展示ルールの発達— 日本教育心理学会第33回総会発表論文集 109-110.
- Underwood, M K., Coie, J.D., & Herbsman, C.R. 1992 Display rules for anger and aggression in school-age children. *Child Development*, **63**, 366-380.

—1996. 9. 30 受稿—